

《概観》海上覇権国として栄えた順 ポルトガル→スペイン→オランダ→イギリス

大航海時代の背景

イベリア半島の新興国家、ポルトガルとスペイン（1479年、アラゴン、カスティリヤが統合されて成立）は、なぜ競って新航路を開拓したか？

- 1) 両国とも中央集権国家を目指しており、莫大な利益をもたらす【1: _____】に注目し、アジアに行って直接貿易を行い、これで財政を確立しようと考えた。同時に新たな領土獲得にも期待した。こうして始まった冒険的航海者の活躍する15世紀～17世紀の新航路開拓の時代を【2: _____】という。
1405年から33年にかけて、永楽帝の命で鄭和 1371-1434? の大艦隊がインド洋、アフリカ東岸に達しており、大航海は既に行われていたから、この時代をを大航海時代と呼ぶことに批判的な研究者もいるが、本書では代表的な教科書の表記に従い大航海時代と呼ぶ。もっとも、かつてはこの時代を「地理上の発見の時代」と呼んでいたが、この表現がなぜ不適切か、諸君はお分かりと思う。
- 2) 胡椒などの香辛料はなぜ必要不可欠なのだろう。当時のヨーロッパは、穀物生産だけでは十分な食料が得られず、牧畜で補っていた。家畜の大半は越冬の飼料が足りないため晩秋には次々と処分された。いかに冷涼とはいえ冷蔵庫などなかった当時、畜肉の保存は大きな課題であった。主要な方法は「塩漬け肉」にすること。その際、塩とともに欠かせないのが香辛料だった。
- 3) 15世紀には東地中海をとりまく地域が【3: _____】の支配下に入り、彼らは香辛料貿易を独占し、外国の商人は高い貢租を支払わないと取引できなかった。【4: _____】の影響も大きく、イタリア商人による東方貿易は衰退した。需要は増大しているのに供給は減少し香辛料などが不足していた。イタリア商人が蓄積した東方の商業知識、航海、造船、天文、地理などの知識は新航路開拓に役だった。
コロンブスの西インド諸島到達は1492年、ヴァスコダガマのカリカット到達は1498年であるが、オスマン帝国のレヴァント地方占領は、これらより後の1516年であり、イタリア戦争の開戦は1494年である。アジアに直行する新航路開拓の動因は、西ヨーロッパ社会の発展であり、オスマン帝国の東地中海征服やイタリア戦争という事態は重要ではあるが、これらが全くなかったとしても、おこったはずである。
- 4) 東方への関心は高かった。ここで言う東方とはレヴァント地方のことではなくアジアのこと。マルコ=ポーロの『【5: _____】』（=「東方見聞録」は不正確な名称）は、アジアの豊かな【6: _____】・銀への憧れをかきたてた。同書に登場する「ジパング」※1とは『【7: _____】』という意味であり、日本を指すJapanの語源である。また、アフリカ奥地に『【8: _____】』というキリスト教徒の君主国があるとされていた。根拠に乏しい伝説であるが、新航路開拓の誘因の一つとなったことは確かである。これに到達し協力して、オスマン帝国を挟み撃ちにしようというものである。また、新航路開拓によって、新しい土地に布教（伝道）することでカトリックの信徒を増やし、イスラーム勢力に対抗していこうという意図もあった。
カルケドン公会議(451)で異端とされた単性論派は4世紀には阿克苏ム王国（紀元前後～12世紀 今日のエチオピア）で広まり、エジプトにも6世紀以降コプト教会が建てられた。伝説的な東方キリスト教国家の君主、プレスター・ジョンの話が流布されたのは12世紀から17世紀で、十字軍が苦戦する中、東方からの援軍に期待する気持ちが生み出した伝説である。インド、後にモンゴルなどの中央アジア、エチオピア、ジンバブエ等が「プレスター・ジョンの国」として推定された。
※1 かわぐちかいじさんによる近未来SF漫画のタイトルも『ジパング』。(2000～09年 講談社『モーニング』)
- 5) 科学技術・航海術の進歩、【9: _____】の開発、快速帆船の普及、自衛・攻撃用の【10: _____】・鉄砲の実用化で、遠洋航海が技術的にも可能になった。これらが、大航海時代の大きな前提である。また、特にスペインの場合は地球球体説も重要であった。【9】、火薬、活版印刷術は、「ルネサンスの三大発明」（ホントは改良、オリジナルは中国）である。
- 6) イスラーム航海者たちの先駆者業績もあった。

インド洋へ、ポルトガルはアジアに先手を打った！

- 1) ポルトガルは、レコンキスタの完成（1492）を待たず、13世紀にはイスラームの支配を脱し、なおも戦い続けていた。
- 2) ポルトガルの【11: _____】（1394-1460「航海王子エンリケ」とも呼ぶ）は、地理や航海術の研究を進め、1415年、北アフリカのイスラーム教徒の根拠地セウタを攻略した。15世紀前半、アフリカ西岸を開発し、1445年、アフリカ最西端ヴェルデ岬を発見したのも王子の探検隊である。（王子のままに死亡。即位していない。船酔いがひどく、本人は航海に出なかったとも言われる。）
- 3) 仮にアフリカ大陸が赤ちゃんのオムツのように南極を通過して反対側まで伸びていたとしたら、アフリカ大陸を回り込むことなど不可能である。1488年（1487年とする説もある）、【12: _____】位1481-95の命により、ポルトガルの【13: _____】は、アフリカ南端の【14: _____】に達した（図1）。アフリカ大陸の南端を確認できたことから、これを回ってインドに達する可能性が開けた。これは「航海王子」エンリケの死後のことである。ディアス自身は「嵐の岬」と命名したが、ポルトガル国王ジョアン2世はこれを「喜望峰」と命名し直した。「希望」ではなく「喜望」。「峰」も注意。
- 4) 1497年7月、【15: _____】（「幸運王」位1495-1521）の命により、ポルトガルの【16: _____】は、リスボンを出帆、喜望峰、東海岸のマリンディを経由し、ムスリムの水先案内人を得て、1498年5月に、【17: _____】西岸



のマラバル海岸の【18: 】(現コジコーデ)に到達した(図1)。この時にイスラーム商船群に奇襲攻撃をかけ、部族長より大量の胡椒を略奪し、1499年9月帰還した。こうしてインド航路は乱暴に開かれた。

- 5) ポルトガルはインド洋でオスマン帝国と戦いながら、1510年には、インド西岸の港市【19: 】を占領、ここに総督府を置いた。セイロン島も占領時期ははっきりしないが、1505年の上陸以降、徐々に支配を固めた。

1511年、香辛料交易の東の中心、【20: 】王国を倒し、1512年、【21: 諸島】(香辛料の原産地)を獲得した。図2の横線部分がポルトガルの占領域である。なお、マラッカ海峡を押さえられてしまったオランダはインド洋からスダマラヤ海峡を通ってバタヴィアに至る航路を開拓 11K した。オランダは1641年にはマラッカを奪取している。

- 6) ポルトガルは、マラッカ、モザンビーク(アフリカ東海岸)、ホルムズ島(ペルシア湾口)などに要塞を築き、強力な大砲を装備した武装貿易船団の威力で、海のイスラーム=ネットワークを寸断し、ムスリム商人の紅海・地中海経由の香辛料貿易を阻止して、自ら香辛料貿易を独占しようという野望を抱いていた。しかし、これは実現しなかった。No.91で詳述。

なお、1622年、【22: 】はホルムズ島からポルトガルを駆逐した。

モルッカ諸島にはポルトガルに次いでスペインのマゼラン艦隊が西回りて来航(1521)、17世紀初め以降はオランダが支配した。ヨーロッパ人が夢にまで見た香辛料原産地を直接掌握して大量輸送することを実現したのは、17世紀末のオランダだったが、過当競争と需要減で胡椒価格は既に暴落していた。

- 7) 1517年、ポルトガルは中国南部の広州に上陸し、明との直接通商を開始した。海賊の鎮圧に名を借りて、1557年、広州南方の小港だった【23: 】の居住権を得た。1543年、ポルトガル人が種子島に漂着して以来、平戸に来航して日本と交易した。種子島漂着の時、鉄砲が伝来したとされている。ポルトガルは中国と日本の金・銀の交換比率の違いを利用したり、生糸などの取引で利益をあげた。他方、スペインはメキシコ(アカプルコ)、フィリピン(マニラ)間のガレオン船を使った太平洋横断貿易を行っていたことも覚えておこう。

- 8) 16世紀前半には、ポルトガルの首都【24: 】には、喜望峯経由で香辛料、絹織物、宝石などがもたらされイタリア諸港をしのぐ東方物産の集散地として繁栄した。ポルトガルのアジアにおける四大貿易拠点は、ゴア、マラッカ、マカオ、平戸である。そして、ポルトガルもスペインも占領地域の物産を持ち帰るだけでは大きな繁栄は望めなかっただろう。彼らは既存のアジアの交易ネットワークに参入してアジア全域の物産を手に入れ、これをヨーロッパに運んで莫大な利益をあげた。ヨーロッパ人は、待望のアジア商品を大量に輸入できるようになったが、ヨーロッパからアジアに輸出できる商品はほとんどなかった。差額の支払い手段は【25: 】だった。それを供給したのはスペインが支配するアメリカ大陸の銀山だった。

- 9) この時期のポルトガルの最大の「功績」は、強力な海軍と卓越した航海術で、ヨーロッパと東アジアの直航ルートを確立したこと。これだけの大事業を成し遂げたポルトガルも、アジアにおける占領地の面積はごく狭いものだった。領域の支配によらず、ルートの支配によって、複数の世界を結ぶ交易の独占をはかる国家を海洋帝国と呼ぶ。なお、ポルトガルはカブラルの発見・領有宣言(1500)以来ブラジルを支配、このため広くスペイン語が使われるラテンアメリカにおいて、ブラジルだけがポルトガル語圏である。

スペインは大西洋から太平洋へ

- 1) 1469年、カスティリヤ女王【26: 】とアラゴンの王子フェルナンドが結婚・即位し、両国は1479年合邦してスペインが成立した。ポルトガルの動きに刺激されてスペインも新航路開拓に乗り出した。

- 2) レコンキスタを完成させたスペイン初代女王イサベル(位1479-1504 イザベラ)の後援でジェノヴァ生まれの【27: 】(1451-1506 コロン)は、1492年※2、サンタ=マリア号(カラック船、他の2隻はカラベル船)でパロスを出帆、72日間の航海の後、カリブ海の【28: 】(図3)に到達した。

※2 1492年はイスラーム勢力最後の拠点グラナダが陥落し、レコンキスタ(失地回復運動)が完結した年である。なお、コロンブスのフルネームは、クリストファー=コロンブスである。

- 3) コロンブスは【29: 】(1397-1482)の【30: 】を信じ、インドに達するには西回りの方が近いと確信した。当時、学会では地球球体説は既に多数を占め、多くの一般市民も地球球体説を信じていたが、クルーの中には信じていない者もいた。航海中、小規模な反乱が起きている。大西洋は異常なほど島がない海域であり、コロンブス自身も想定外の長期の航海に不安を感じていた。「3日以内に発見できなければ帰還する」と約束させられていた3日目に僚船が島影を発見したと言われている。その後、艦隊の一部が離反したり、サンタ=マリア号が座礁したり、様々な困難を乗り越えて帰還した。彼は、その後3回も航海を行い、カリブ海諸島や中南米沿岸を探検したにもかかわらず、コロンブスは終生そこをアジアの「インディアス」の一部と信じて疑わなかった。今日の「西インド諸島」という呼称はこれに由来する。彼はこの地の人々を「インディオ」と呼んだ。胡椒も何も発見できず、彼はスペインの港街の片隅で不遇のうちに生涯を閉じたと言われている。

